

はじめに

日蓮聖人の著作・書状における知識の伝達手段あるいは檀越の教化手段のひとつとして、「譬喩」という表現法がある⁽¹⁾。研究では、これまで法華経中の譬喩⁽²⁾や中国・日本の故事成語⁽³⁾などの用例を日蓮聖人遺文に求めて論じてきたが、このほかにも因縁や説話あるいは史実が譬喩・例話として活用される例が多数認められる。今回は、遺文における中国や日本の史実に関する表記に着目し、譬喩という概念にとらわれずに遺文における歴史叙述を広く渉猟し、聖人の中国史観・日本史観について考察してみたい。日蓮聖人が中国や日本の歴史について実に豊富な知識を持たれていたことは、よく知られるところであり、本章ではその中でも特に遺文中の日本史に関する歴史叙述を編年的に整理することを通じて、日蓮聖人の日本史に対する知識および認識について概観してみたい。

一、日蓮聖人の日本史記述の特色について

別表は、日蓮聖人の遺された著作・書状のうち真蹟現存遺文・真蹟曾存遺文・真蹟断片現存遺文・真蹟断簡現存遺文に限定して、遺文中に引かれる日本史に関する記述を編年体で整序し、その暦年・事項・『昭和定本日蓮聖人遺文』の出版頁等を年表形式にまとめたものである⁽⁴⁾。なお、本表には、譬喩とは直接関係のない歴史叙述についても採録されている。また、※印は、日蓮聖人の遺文中には見られないもの、日本史上において重要視されている事件や事柄を補足したものである。備考欄に掲げた典拠は、必ずしも日蓮聖人人生誕以前に成立していた文献に限らず、『吾妻鏡』『元亨釈書』など聖人滅後に記録・編纂された文献も広く紹介した。

これによると、遺文中の日本史の記述は、遡れば有史以前の神武天皇の時代（紀元前六六〇年力）⁽⁵⁾から聖人在世の弘安五年（一一八二）まで推定一九〇〇年以上の長きに亘ることが理解できる。近年の考古学・古代史学の研究成果により三〜五世紀の我が国の政治史・外交史が徐々に明らかにされつつあるとはいえ、今日でも当時の詳しい実状は謎とされており、『古事記』『日本書紀』等の記述を頼りにするしかなかった鎌倉時代の人々が五世紀以前の正確な日本史事情を知ることが不可能であったことは疑う余地のないところである。事実、日蓮聖人の遺文中において五世紀以前の記事は全遺文中僅か数箇所に限られている。また、年月日が明記される最古の日本史記述についても、欽明天皇一三年（五五二）一〇月一三日、即ち六世紀中頃の仏教公伝の記事が初見である。

六世紀以降の聖人の歴史叙述における最大の特徴は、その記述の正確さにあるといえよう。確かに別表の備考欄に示したように、今日定説とされている一般的史実とは異なる記述も若干認められるが、それ以上にその記事の正確さには目を見張るものがある。そこで、次に具体的に日蓮聖人の日本史記述の特色について概観し分析を試みたい。

遺文における日本史に関する記事の内容は、巨視的に観れば、仏教史・神道史などの「宗教史」、戦乱史・外交史などを含めた大きな意味での「政治史」、災害史などの「社会史」に関する記述が大半を占めることが窺える。一方、宗教史を除く他の文化史、災害史を除

く他の社会・風俗史、ならびに産業・経済史等についての記述は極めて僅かである⁽⁶⁾。

これは、日蓮聖人が政治や宗教にただならぬ興味・関心を持たれていたことを物語っているといえよう。この内容を更に細分化すると、聖人の日本史記述の特色は以下のように整理できる。

(1) 宗教史について

宗教史については、仏教の流布と興廃に関する記述が大半を占めており、これに対して天照・八幡信仰など神道関係の記述は若干例が散見される程度である。特に五五二年の仏教公伝に始まり、七世紀の三論・成実・法相・俱舍・華嚴・律の六宗伝来による飛鳥仏教（南都仏教）の成立、八世紀の奈良南都仏教の爛熟・発展、九世紀の天台・真言二宗伝来による平安仏教の成立と展開については、実に詳細な記述がみられる。なお、鎌倉仏教の登場については、まさに聖人はその渦中にあつたので、法然や忍性らの活動、延暦寺・園城寺・教王護国寺などの動向等に触れるにとどまるが、鎌倉時代がかつてない仏教の転換期・変革期にあつたことは、日蓮聖人も自ずと認識されていたことと思われる。

(2) 政治史について

政治史については、国家の治乱興亡、為政者の栄枯盛衰に関する記述が大半を占めると言っても過言ではない。六・七世紀の古代律令国家における天皇家の覇権抗争はさることながら⁽⁷⁾、一〇～一二世紀の平氏・源氏による武士政権の台頭⁽⁸⁾、朝廷による院政政治の開始、北条氏による執権政治の登場と、目まぐるしく変貌する日本の政治史を実面的に捉えられている。これとは対照的に、藤原氏が撰閣政治を展開した八・九世紀については、政治的な事柄よりも奈良・平安仏教史に関する記事が多く見受けられるのも特徴的である。いずれにせよ、遺文中に政治関係の史的記述が頻出することは自明の事柄であり、このことは聖人の日本史に対する政治的関心の高さを物語っているものと思われる。

ところで、日蓮聖人が政治史の中心的話題として引かれるものに、争乱・戦乱の歴史がある。遺文における戦乱の記述に関しては、例えば平将門の乱（九三九年）や前九年の役（一〇五一年）に代表される武士の抗争、保元・平治の乱（一一五六・一一五九年）や壇ノ浦の合戦（一一八五年）に代表される源平の争乱、幕府と朝廷の武力衝突となった承久の乱（一二二二年）など、月日単位で緻密に論じられるのみならず、その時代背景・人間関係等についても極めて正確に紹介されているのである。因みに、聖人在世中の戦乱史的記述としては、北条時輔の乱（一二七二年）ならびに文永・弘安の役（一二七四・一二八一年）という二度の元寇に関する記事がみえる⁽⁹⁾。

(3) 外交史について

外交史に関する記述については、主に仏教史との兼ね合いの中で論じられており、五五二年の欽明天皇朝における仏教公伝の記事と、七～九世紀にかけての遣隋使・遣唐使による中国仏教諸宗派の伝播の記事とがみられる。後者は、また大別して、七世紀前半の三論宗初伝に始まる六宗の伝来と、八世紀初頭の天台・真言二宗の伝来とに分けられる。特に平安仏教を開花せしめた、最澄・空海・円仁・円珍らの入唐求法の記述は詳細である。

(4) 災害史について

災害史に関しては、地震・大火・飢饉・疫病等の記述がみえる。まず、地震の記述は聖人在世中の一二五七年の正嘉大地震の一例のみが説かれる。大火の記述は、戦乱による焼討ち等の事件を除けば、九六〇年の内裏炎上、一二五〇年の鎌倉大火、一二六九年の根本

中堂炎上、一二八〇年の鶴岡八幡宮炎上の記事などがある。また飢饉・暴風・洪水等については聖人在世中の一二五〇年代、一二七〇年代に頻繁に起こっていることがわかる。疫病については、紀元前一世紀の崇神天皇朝の事例をはじめ、六世紀中頃の疾病の流行、聖人在世では一二五〇～一二七〇年代に頻発する疫病流行の記事がみえる。なお、祈雨に関する記事から、当時旱魃が起こっていたであろうことが推測される例が、八一八、八二四、一二七一、一二七四年などの記事にみえる。

二、日蓮聖人における仏教史観と政治史観

このように政治史・外交史・災害史など多岐にわたる日蓮聖人の歴史叙述のほとんどは、宗教とくに仏教との関わりの中で把握され、認識され、解釈されていることが指摘できる。日本の政治や社会の動きを仏教との因果関係の中で捉えらようとするその姿勢は、仏教史を常に念頭においた聖人の歴史認識の最大の特徴といえよう。

周知のとおり、国内情勢の混乱すなわち戦乱・災害等の事件は、仏教あるいは正法を蔑ろにする謗法行為の結末であるとするのが、聖人の基本的立場である。

例えば、六世紀に欽明・敏達・用明の三天皇が疫病流行のため仏教崇拝を躊躇したり、物部氏による廃仏毀釈が起こった結果、三天皇は崩御、物部氏は滅亡したこと、一一八〇年に延暦寺・園城寺・東大寺・興福寺を焼き討ちした平清盛は翌年熱病で狂い死にし、更に平家一族も一一八五年に壇ノ浦の合戦にて滅亡したこと、一二二一年に真言宗に幕府調伏の祈禱を命じた後鳥羽上皇は、北条幕府軍に敗れ隠岐に流罪、土御門・順徳上皇も阿波・佐渡へそれぞれ流罪、仲恭天皇は廃位の憂き目を見たことなどは、みなこの例である。そして、日蓮聖人は、これら歴史的事件をもって、現代（聖人在世）の日本国に照らし合わせ、正嘉・文永年間以降断続的に多発する天変地天、一二六四年の延暦寺・園城寺の武力抗争、一二七二年の北条時輔の乱、一二七四年の文永の役、一二七五年の鎌倉大火、一二八〇年の鶴岡八幡宮炎上、一二八一年の弘安の役など一連の不穏な事件は、いずれも日本国滅亡の前兆であるとし、これらはすべて法華経に対する謗法行為および法華経の行者日蓮に対する迫害行為が引金となっていると断言せられるのである。

このほかにも、政治と仏教の緊密性に取材した記述として、仏教徒側が政治に介入したり、逆に政治の干渉を受けた事例がみえる。参考までに、政治的事件に巻き込まれたり、あるいは事件の主謀者となった僧侶を遺文中に検索すると、七六九年に宇佐八幡神託事件を起こした道鏡、一一七七年の鹿ヶ谷の陰謀を巡ってその前後に流罪された明雲と俊寛⁽⁶⁾、一二〇七年に念仏停止で土佐流罪された源空などの例がみえ、古代・中世の日本において政治と仏教の相互干渉は極めて自然の姿であったことが読み取れる。これらをふまえてみるに、日蓮聖人における政治への積極的な働きかけは、仏教徒として当然の行為であったといえるのである。

以上のことから、聖人の歴史認識は、政治と仏教との関わりに重きが置かれていることを改めて認識できるのである。聖人は、日本の歴史が、政治史と仏教史との有機的関連によって形成されてきたとする観点に立たれている。つまり、仏教は政治を映し出す鏡であり、その逆に仏教が政治に与える影響力も軽視できないことを、日本の歩んできた歴史を紐解くことにより力説されているのである。これは、管見ではあるが日本史に限らず中国

史の場合にも言えることであり、聖人の歴史観のひとつの特質といえよう。

むすびにかえて

以上、日本史に関する日蓮聖人の歴史叙述について概観してみた。本章では、編年体で遺文中の歴史叙述を整理し、これを概観する程度にとどめたが、今後はこの考察をもとに、更に詳細な分析を行ってゆきたい。また、聖人が歴史的記事を紹介するにあたり依拠されたであろう典拠についての検索の必要性が従来より指摘されているが^③、『日本書紀』『扶桑略記』等の歴史書、『平家物語』『源平盛衰記』等の軍記類、寺院関係の古伝等の文献類に収録される記事と対比することで、聖人が日本史の知識をいかなる典籍を通じて吸収され、またいかなる経緯によって獲得されたかを追求することも重要となってくるであろう。これについては聖人の幼少期・遊学期における学問的環境も配慮する必要があると思われるので、今後の検討課題としたい。

解決すべき問題点は多々残るが、本章の考察により以下の事実が再確認されたかと思われる。

まず、遺文における日本史の記述は、史実と照らし合わせても実に正確であり、日蓮聖人の日本史に対する認識の深さ、その理解の的確さを把握できた。特に政治史や社会史に関わる記事の頻出は、聖人がいかに日本の政治的問題や社会情勢に関心を寄せられていたかを物語っている。

また、仏教との兼ね合いから日本史を振り返ることが頻繁になされ、特に戦乱・災害等による国家・政治の崩壊をめぐっては、実に数多くの類似した事例を見いだすことができ、いずれの場合も、為政者や権力者の仏教に対する誤った信仰が背後にあったことを指摘されているのが特徴的である。

注意すべきは、これらの表現の裏に、日本国家の危急存亡に対する、聖人の危機感と焦燥感とが見え隠れしている点を見逃してはならないことである。すなわち、遺文におけるこれら史実の取材は、聖人が歴史の中の日本を常に当世の日本国に鑑みて、亡国の危機を憂慮されたものと拝察することができるのである。言わば、これらの表現は、「立正安国」の精神に基づいた聖人の平和思想に根ざしているのである。

反復される悲劇は、愚かな人類の所産である。人間は幾度となく同じ過ちを犯す生き物である。過去を顧みて現代を問い直すこと、これこそが聖人の歴史観の根幹にある姿勢なのである。

註

(1) ひとつの結論を導くための複線として用いられる例話・因縁・説話・故事・史実などの説示から、「仏種」「獅子吼」など譬喩的意味合いを有する語句、諺などの成語に至るまでは、おおかた「譬喩」という表現の範疇にとらえることが可能である。なお、詳しい譬喩の定義については、拙稿「日蓮聖人における薬王品十喩の解釈について」(『日蓮教学研究所紀要』二二号、一九九五年)を参照。

(2) 拙稿「日蓮聖人における譬喩蓮華の解釈」(『日蓮教学研究所紀要』二一号、一九九四年)、「日蓮聖人における薬王品十喩の解釈について」(前掲書)、「譬喩にみる日

蓮聖人の法華經観―法華経および題目五字七字の譬喩的表現を通じて―」（『仏教学論集（立正大学大学院仏教学研究会）』二二号、一九九七年）等。

（3）「語源散策（一）比翼の鳥、比目の魚／風条を鳴らさず、雨塊を破らず」（『法華』八七四号、一九九八年）、「語源散策（二）橘化して枳と為る」（『法華』八七五号、一九九八年）、「語源散策（三）忠臣は二君に事えず、貞女は二夫を更めず」（『法華』八七六号、一九九八年）等

（4）別表の作成に関しては、塚本善隆編『望月仏教大辞典』巻六「大年表」（世界聖典刊行協会、一九六七年）、斉藤昭俊編『仏教年表』（新人物往来社、一九九四年）、鎌田茂雄他編『仏教史年表』（法蔵館、一九七九年）、歴史学研究会編『日本史年表』（岩波書店、一九九三年）、市古貞次他編『日本文化総合年表』（岩波書店、一九九〇年）、桑田忠親監修『日本史分類年表』（東京書籍、一九八四年）、児玉幸多他編『日本史年表・地図』（吉川弘文館、一九九七年）、影山堯雄編『新編日蓮宗年表』（日蓮宗宗務院、一九九三年）、歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史』一〜四巻（東京大学出版会、一九八四年）等を参照した。

（5）『日本文化総合年表』（前掲書）による推定年代。

（6）歴史事項の項目分類は、『日本史分類年表』（前掲書）の分類法に基づいた。

（7）遺文中の天皇に関する研究としては、佐々木馨氏「日蓮と天皇（上）―国主観との関連で―」（『日本仏教』四三号、一九七七年）、同「日蓮と天皇（下）―国主観との関連で―」（『日本仏教』四五号、一九七八年）、佐藤弘夫氏「日蓮の天皇観」（『東北大学文学部研究年報』四二号、一九九三年）等がある。

（8）遺文中の武士に関する研究史としては、今成元昭氏「御遺文に登場する武人をめぐって」（『日蓮聖人研究』、一九七二年）、佐々木馨氏「日蓮と武士」（『仏教史学研究』二二巻二号、一九七八年）、山下正治氏「日蓮遺文の平清盛」（『立正大学文学部論叢』一〇四号、一九九六年）等がある。これら諸氏の研究では、日蓮聖人の記述と『平家物語』の記述とに相違がみられることが指摘されている。

（9）一二七二年二月一日に鎌倉で起こった北条教時誅殺の知らせは、同年五月二五日の『日妙聖人御書』（六四七頁）に初見がみえ、同書は佐渡において執筆されたところから、少なくとも約三ヶ月もしくはそれ以内で鎌倉の情報が佐渡の地まで伝わったことがわかる。また、一二七四年一〇月五日に老岐・対馬で起こった文永の役については、同年一月二〇日に身延で執筆された『曾谷入道殿御書』（八三八頁）に初見が確認されるところから、こちらは九州から身延まで約一ヶ月半程度もしくはそれ以内で情報が伝播している。因みに聖人在世中の事件で、その情報の伝達期間を一瞥すると、例えば一二六八年一月八日の蒙古国書到来については、同年四月五日鎌倉執筆の『安国論御勘由来』（四二三頁）に、一二八〇年一月一四日の鎌倉鶴岡八幡宮炎上の情報は、同年一月一八日身延執筆の『智妙房御返事』（一八二六頁）にそれぞれ初見が認められる。これら諸書の執筆に費やした期間および鎌倉時代の情報網の状況等を考慮する必要があるが、聖人は概ね一〜三ヶ月以内という短期間で、鎌倉から佐渡へ、京都から鎌倉へ、鎌倉から身延へ、九州から身延へと、様々な情報を収集できたことが窺える。

（10）俊寛については、後藤丹治氏「日蓮聖人御遺文と平家物語」（『立正史学』、一九三

八年)に詳しい。氏の研究では、日蓮聖人における『平家物語』享受説が主張されている。

(二) 高木豊氏は「日蓮における日本史の知識と認識―鎌倉在住期の場合―」(『仏教史と仏教学論集』、一九八七年)、「日蓮における日本史の知識と認識―聖徳太子・道昭・和気清麻呂―」(『東アジアと日本―宗教・文学編―』、一九八七年)において、聖人の依拠されたであろう典拠の検索、およびこれら典拠と遺文における記述の同異についての比較検討の必要性を強調されている。